

番組組

(13:30)

能

兼平

(シテ) 今井 克紀

(ワキ) 村山 弘
(アイ) 鈴木 実

(後見) 豊嶋 幸洋
廣田 幸稔
宇高 徳成

(地謡) 湯川 稜 重本 昌也
山田 伊純 金剛 龍謹
宇高 竜成 種田 道一
惣明 貞助 豊嶋 晃嗣

狂言

棒縛

(次郎冠者) 茂山 宗彦

(主人) 網谷 正美
(太郎冠者) 茂山 逸平

(後見) 鈴木 実

(15:30頃)

能

黒塚

白頭

(シテ) 今井 清隆

(ワキ) 有松 遼一
(ワキツレ) 岡 充
(アイ) 島田 洋海

(太鼓) 前川 光長
(大鼓) 河村眞之介
(小鼓) 林 吉兵衛
(笛) 森田 保美

(17:00前)

(後見)

豊嶋 幸洋
金剛 永謹
豊嶋 晃嗣
宇高 竜成

(地謡)

中村 洋臣 徳田 宣幸
惣明 貞助 廣田 幸稔
宇高 徳成 松野 恭憲
山田 伊純 廣田 泰能

主催 今井後援会 後援 京都新聞社

能 兼平

二番目修羅物。五万の大軍で信濃を出た主君木曾義仲が、滋賀大津の粟津原にて巴御前を含む主従七騎となる中、共に最期をとげた重臣今井四郎兼平の奮闘を描いた曲。

最初、一人の僧(ワキ)が義仲の菩提を弔うため琵琶湖矢橋(やばせ)の浦に着いた旨、ワキ座に座します。次に柴舟の作り物が舞台に出ると、続いてシテ老翁の船頭が登場。シテが舟に乗り竿を持つと、ここは船頭がこの浦に舟を漕ぎ寄せた態を表します。舟を見つけた僧はその舟に乗船を依頼。しかしこれは渡し舟ではなく柴を運ぶ舟だと一旦は同船を断わりますが結局、出家僧とみるや彼を舟に乗せ辺りの名所案内をするうちに対岸の粟津原に到着。すぐにシテは竿を捨てそのまま何事もなく消え失せ中入りです。

例によりアイ狂言(船頭)が出ますが、担つて出た竿は先程シテが持つて出た竿そのもので、船頭仲間では今日は自分が舟を渡す当番だからと僧に対し「向いへ超させようか」と尋ねますが僧は「今向うから渡つて来た」と答え、アイは「妄語を言うな」とのやり取りの後、先程の船頭は兼平の亡霊であった事を教えます。そして僧に義仲と兼平の最期の有様を語るのですがこれを聞いた僧は、兼平らの霊に対して回向を始める旨の待ち謡いを謡うと今度は勢いのある囃子に乗り、後シテ今井兼平の霊が夢中に現れ、橋掛りで謡つたのち舞台を一巡し、今井四郎と名乗りつつ中央で床几に腰掛けますが、これは馬上の意。クセの前半では義仲ひとり自害のため松原を目指す途中、薄氷を踏み破り馬ごと深田に落ち、流れ矢に当たつて空しくなつた事が謡われ、これを知った兼平も覚悟を決めて一騎当千の勢いで戦う様を演じ、その後自害の手下として、太刀をくわえて馬上より真つ逆さまに咽喉を貫き落ちる壮絶な最期のさまを見せます。

使用面 前シテ 三光尉(さんこうじょう)
後シテ 平太(へいた)

能 黒塚

白頭

福島県安達原の黒塚に鬼女が住むという伝説からの劇能。前半は人生のはかなさを嘆くシテ老女が、鬼のイメージとは逆の寂しく孤独な情景が描かれます。

先ず小屋の作り物が出され、掛けられた引き廻しの幕が降ろされると、中にひとり老女(前シテ)が座り、舞台はたちまち荒涼たる安達原です。そこへ那智の東光坊の山伏(ワキ、ワキツレ、アイ狂言)の一行が通り掛り、日暮れて一夜の宿を求めます。老女は了承し小屋より出て中央に座るのですが、ここで舞台全体が老女の家の内に変わります。やがて女は糸を繰りつつ自身の身のはかなさを嘆いた後、夜更けの冷え込みと共に裏山へ薪を採りにその場をあとにします。所が出掛けに突然ふり返り、自身の閨(ねや)を覗くなよと山伏達に厳しく言い捨て、鬼気迫る気配で幕へ走り込み中入り。

しかし見るなどと言われると見たくなるのが人情。随行の能力(アイ狂言)が約束を破り、女の寝室を覗き見てアツト驚く。そこは人の死骸の山でした。彼女の本性は人食い女。山伏達は急いでその場を逃げ去ります。急進の囃子に乗り後シテ鬼女が追つて出、約束を破つた恨みに鬼ひと口に食わんと猛烈な勢いで彼らに襲い掛かります。舞台から橋掛りへと両者は争いますが、ついに鬼女は山伏達に祈り伏せられ消え去ります。

女の鬼「般若」と僧との立ち廻りは「道成寺」「葬上」にも見られますが、強さや執念、陰湿な嫉妬など、それぞれに心得が異なります。また本曲のアイは語りべとしてではなく、劇中の「のぞき見役」を演ずる重要な役どころです。常は前シテが曲見(しゃくみ)で中年女の面、後シテは黒髪ですが、本日の演出では前シテは姥、後シテは文字通りの白頭の扮装に変わり、一層緩急の烈しさが楽しめます。

使用面 前シテ 姥(んぼ)
後シテ 般若(はんにや)